

第十四章 まとめ：文化史学の領域

レポート講評

レポート課題：ヨーロッパにおける最近の歴史学の流れ

レポートで注目されたのは言語論的転回と歴史修正主義に言及するレポートが多かったことである。言語論的転回に関しては長年歴史学を支配してきた文献史料絶対主義に対する懐疑と批判、テキスト作成者の言葉と意図をレンズとして物語れる「現実」、その「現実」を過去の世界に客観化する歴史家の行為への考察が展開された。また言語論的転回と並行して現れた歴史修正主義への言及が多くレポートで為された。

一般的にアナル学派が隆盛となって以降の歴史学の流れがレポートの主たる関心となっていた。多くのレポートは認識論から説き起こし、解釈学的手法に対する批判として数量化と社会科学的研究報への接近、そして移民の流入や多民族・多文化状況の出現に対する姻族的視点への回帰と再評価、文化を総体としてとらえエリートの文化のみならず庶民の文化をも対象とする新しい文化史の台頭という流れでまとめられている。

どのようなキーワードがレポートで使われていたのかを以下列挙する。

アナル学派（第三世代と第四世代）、ベネディクト・アンダーソン、ピエール・ノラ、ピーター・バーク、エドワード・サイード、従属論、ポストモダニズム、ミクロストリア、文化構築論など。

文化から過去を理解し説明する文化史学

我々は過去を裁くことができるのか？ヨーロッパ人による新大陸征服の端緒となったコロンブスを、新大陸に天然痘などの病気を伝え、現地住民の大量死を招いたこと、

新大陸を金や銀の搾取対象としたこと、奴隷制を導入する切っ掛けを提供したこと、ヨーロッパに対する新大陸の苦難の従属の歴史の幕を開いたこと、などの廉で非難できるのだろうか？勿論、それはできるが、その非難は過去を変えることにはならない。過去に対する評価を変えるだけである。

つまり、コロンブスは 15 世紀のヨーロッパ人が持っていた文化を基準として行動したのである。黄金への欲望、キリスト教への絶対的信念、香辛料とアジアへの憧れ、ヨーロッパに存在していた身分制の意識、スペイン国王と交わした契約とその履行の義務、……。それが楽天的な西欧化・近代化・文明化でないことは言うまでもない。

同様に、マゼランが世界周航を企てた事業も地球が球体であることを単純に証明しようとしたと片付けられるべきものではない。当時の文化によって動機付けられ、その行動が彩られていたのである。

彼はプトレマイオス以来の西欧の知的文化の伝統の中で育まれており、地球を実際よりはかなり小さく見積もっていた。東回りでアジアに到達する距離は知られていたが、西回りの距離は知られていなかった。また当時の船舶がせいぜい百トン程度の小型船でしかなく、積載できる食料等に限界があることも、長期にわたる航海でビタミンCの欠乏により壊血病が生じることも知られてはいなかった。

彼は何よりもモルッカなどで生産される胡椒などの香辛料を求めていたのである。黄金よりも高価に取引される香辛料。そこには香辛料を消費する西欧の文化があった。そしてフィリピンに辿り着いたとき、彼は現地住民にキリスト教を広めようとし、武力でそれを強制しようと試みたのである。それは新大陸の各地で見られた既視体験済みのことであった。しかしこれはマゼラン個人の問題というより、西欧の文化の問題であったというべきだろう。

つまり、15 世紀の西欧という世界での文化という視点で 15 世紀から 16 世紀の航海者たちの行動を見ると、彼らがやってしまったことは容易に理解できるし、評価でき

るのである。すべての人間の行動や思考はその人間個人の文化のみならず、個人が育まれてきた時代や社会の文化に動機付けられ、規制されている。

文化史における現在と過去の関係

歴史が「現在と過去との対話」であるというカーの言葉はよく知られているが、このことは現在の価値観が絶対で、過去の価値観がそれに劣るということを意味している訳ではない。大事なことは、現在は過去から生み出されてきているが、現在が過去を裁くといったものではなく、現在と過去の違いを認識するという事、そして現在と過去のそれぞれの独自性を評価するという事である。

同時に同時代の中の文化に優劣はないということも心しておかねばならない。それぞれの文化は過去の伝統と現在の文化環境に対する適応の産物だということである。

文化翻訳と文化史学

文化の流れに優劣は存在しない

ローマ化とアメリカ化

かつては地中海沿岸に都市が建設されるとローマ化と評価されてきた。確かに中心にはフォーラムがあり、神殿やローマ風の劇場、剣闘技場、バシリカや公共浴場、時には水道橋がそれらの都市には見られた。また神殿はアウグストゥスやその時々皇帝を崇拜し、ユピテルやユーノーなどのローマの神々が祭られていた。さらにはラテン語による碑文があちこちに設置され、人々の目に触れるように展示されていた。またこれらの都市は *minicipium* や *colonia* などのローマ都市としての地位を示す名前を冠していた。

それが故に、これらの都市の出現と発展をもって「ローマ化」の証と主張できるのだろうか？よく見るとこれらの都市はイタリア半島に見られる都市と微妙に異なる点も目に付く。ユピテルやユーノーなどのローマの神々の名前に、ガリア系の神々の名前がアトリビュートとして付けられたり、バアルなどのフェニキア系の神々の名前が付いたりして、どこか違う。ガリアでは神殿がこれらの都市とは全く違うところであったり、北アフリカではかつてのフェニキア時代の神殿の上に作られていたり、ユピテルとバアルのように雷という点で共通する要素を持っていたり。

私たちはこれらの現象を単純に属州にローマの先進文化が移植されたと評価するのではなく、帝国の政治的中心地の文化が属州民の「翻訳」という行為によって再構築されたとみた方が適切である。ローマ文化のコードからいろいろな点で逸脱しているケースが見られるからである。

アメリカのベースボールが日本に紹介され、野球に翻訳されたことはよく知られている。ベースボールを野球と翻訳したのは中馬 庚（ちゅうまん かなえ）と言われ、明治27年（1897年）のこととされる。その野球が完全に日本化されており、アメリカのベースボールに似て非なることはよく指摘されている。ある種の精神主義が強調され、ホームランは勿論、ヒットが評価され、シーズンオフの練習が重要視され、個人プレーよりはチームプレーが大事にされる。これは日本がアメリカに征服され、その文化を強制的に移植されたのだということの意味しない。むしろ、日本人がアメリカのスポーツを輸入し、日本人好みに色づけし、日本の文化に合わせていったと言うべきであろう。

つまり外来の文化を「文化翻訳」を通して自分たちの文化の中に違和感を感じさせることなく、取り込んでしまう、このような行為が過去から現在まで行われてきたし、また行われようとしている。京都の町を歩いていると、よく家の中から『般若心経』を唱える声が聞こえてくるし、有名なお寺に行くと、観光客が『般若心経』の写経をしている光景を良く目にする。

しかし仏典は何故「アヴァローキテーシュヴァラ・ボーディサットヴァ・チャルヤム・チャラマーノー・ガンビーラーヤム・プラジュニャー・・・」とサンスクリット語で読まれず、漢字テキストで、それも中国語ではなく日本語読みの感じで読まれるのか？「観自在菩薩行深般若波羅蜜多時、照見五蘊皆空、度一切苦厄。舍利子。色不異空、空不異色、色即是空、空即是色。」は有名な『般若心経』の冒頭部分であるが、これを日本語による漢字の読みで「かんじざいぼさつぎょうしんはんにゃはらみたじ、・・・」と読んでいくのである。日本語としてはこのままでは意味を成さない。「智慧をもって観照され、自在の妙果を得られた菩薩（観音菩薩）様が、深遠なる「智慧の波羅蜜」を行じられていた時に、人間の肉体と精神を構成する五つの要素は空であると見抜かれて、あらゆる苦悩から解放されたのです」、というような意味なのだが、そのような意味があるということをお経を唱えているという風ではない。

そして一種の呪術的な意味を込めて唱えられる場面に遭遇することもある。或は一日の始まりのけじめとして唱えられることもある。或は亡き人との会話を行っている人もある。そして言えることはこのように使われるということも「文化翻訳」である。

リュディアとギリシアの事例

リュディアではギリシア神殿風のファサードを持つ墓を作っているが、ギリシアでは神殿の建物が墓に使用されることはない。神の領域と死者の領域は絶対に区別される。しかしリュディアではこのようなコードは適応されない。同じようなことはエトルリアで複製されるギリシア風の壺と壺絵についてもいえよう。彼の地で作られる複製品はギリシア風であることが求められ、厳密なギリシアコードで作られることは求められていないのである。日本での結婚式の例を見てみよう。新郎新婦は蠟燭をもって披露宴の会場に入り、出席者のテーブルにある蠟燭に火を点して回るが、これも西欧のスタイルを真似たのであって、蠟燭を点すという行為と披露宴との必然的な関連はない。

文化史学とは何か

人間による思考・行為・その結果を文化と捉える。

思考・行為・行動・結果は価値観や関心、知識、経験、心理状況、思考形式や行動形式に影響される。

これらは個人によって異なるが、社会や時代によっても異なる。

歴史学そのものを文化的営為と捉える。

従って、文化史学では歴史学が扱う全ての対象を文化と捉え、時代や社会、国家や個人を文化に強く影響された文化的産物と位置付けて、過去を分析し評価する。

近代批判（時代と方法）としての文化史学

文化史学は近代を批判する学問として発展。

科学主義の時代への批判

ランケ史学が近代を象徴ずるとするなら、またマルクス主義の科学主義への性向が近代の特徴であるとするなら、文化史学はこれらの国家主義、合理主義に対する異議申し立てであった。

政治指導者が歴史の主役となり、庶民が名前も持たされず、群衆という塊でしか扱わない歴史学への批判であり、決別であった。

文化史学の矮小化

歴史学は文化史学を主観的だと非難してみたり、歴史学の非常に狭い領域しか扱っていないと矮小化したりしてきた。文化史学はそのような歴史学に対する抵抗であり戦い

であった。文化史学は既存の歴史学の偏狭さを批判し、歴史学が目を向けようとしなかった世界、時には非合理的な世界に着目したのである。

文化史学の総体性（二重の総体性）

文化史学の特徴は何よりもその総体性にある。その総体性は二重である。ひとつは人間活動のすべてが文化であるという総体性。もうひとつはすべての行為は文化によって規定ないしは方向付けられているという意味での総体性。

これらの二重性によって文化史学は領域的広がりのみならず、文化の動的把握を可能としている。またそれが故に歴史学のように外交史から社会経済史、社会経済史から社会史、社会史から文化史へと学問の中心軸を移していく必要性が文化史学にはなかった。

文化史学の領域

美術史や文芸史は文化史学の重要な領域であるが、それだけではない。生活史も重要な領域であるし、政治史も重要な領域である。人々の政治行動大きな影響を及ぼす価値観や理念、行動パターンも文化史学の重要な領域である。既にマックス・ウェーバーがエートスを論じたように、社会的資本が蓄積され、経済圏が拡大されても経済人としての行動は同じではない。即ちこれらの経済指標だけでは経済活動の特徴を説明できないのである。

個別的な様式の特徴を説明し、その発展と変相を観ていくだけでは十分とは言えない。社会が持つ文化的背景、何故そのような様式を受け入れていったのか、或いは必要としたのか、を観ていかななくてはならないし、そのような様式を生産し消費していく文化を解明していかななくてはならない。

文化構築体と文化翻訳

何故なら文化史学はひとつの文化財の製作や、芸術的美を説明することで満足しないからである。文芸史や芸術史は文化史のひとつの分野でしかない。生活史や技術史も、政治史や経済史も文化史の中に含まれる。

文化構築（体）・・・ウェーバーのエートス論・アンダーソンの言語と国民国家・政治も経済も文化構築と考えられる

文化翻訳・・・翻訳者の主体性と自己の文化の中に外来文化を取り込んでいく。ベースボール（パワー）から野球（上手さ）へ（切磋琢磨、錬成、自己研鑽など）。

文化行動・・・個人や社会の行動はそれぞれの文化（行動規範や価値観、行動様式など）に規定されている。地震の時に机の下の潜る、とかゴミを掃除して帰る（「来た時より美しく」：掃除は他人がやるものではない）とか、「5分前集合」（cf. 「京都時間」というのもあるが）、「名を惜しむ」（恥を恐れる）、合理的行動から非合理的行動への急変（座して死を待つよりは・・・：理性的行動から情緒的行動へ：カタストロフ論）、お上の意識（嘆願書・請願書）というのは小学校以来の学校で反復される実習の結果である。